

その「農家生活」の中味を「個別経営」と「生活」に分けて考えられるようだ。そこで、我々は「個別経営」という言葉は使いますが、「個別生活」という言葉は使わない。ということは、「生活」という概念の中に、すでに「ムラ」というものがかかわっている。だから経営は個別的に考えられるけれども、「農家生活」という場面では、「村落生活」が加わっているのではないかという気がします。そこで御議論いただきたい第一点は、その「村落生活」という表現を「農家生活」というように押えていいかどうかという点です。

討論

(1) 「村落生活」を村落社会における「農家生活」と置き換えててもよいか

山本陽三（以下陽三と省略）

大会に向けての研究会をどのように組織していくか、そしてテーマをどうするかという方向で、今までの御報告を若干乱暴に整理させていただきます。昨年来的テーマの「村落生活の変化と現状」ですが、この概念自体が曖昧な表現だなという気がします。一つは、「村落」に住んでいる人の「生活」ともれるし、「農家の生活」という意味で使う人もありましょう。単に「村落」という事をシャレって「村落生活」と表現したという感じもあります。今までの御発言ですが、「農家生活」という事がだいたい中心ではないかと思われます。かつ、

「破壊」の呪縛から解放されたいという気がします。というのは、いま高山先生のお話にありましたように、日本全体が資本の論理によって、「生活破壊」が進行していくんだといえます。いまさら「破壊」という言葉を使わなくていいのじゃないか。それと、破壊されているかいないかというのは、調べた後の結果の評価であつて議論の前に評価の方が先に出てくるのはどうかという気がします。今年は「破壊」ということを少し離れて、「村落生活」あるいは「農家生活」そのものにアプローチをした方がいいのではないかと思います。

第三点は、高山さんの御議論でも、日本の独占資本により農業の生産力がやがては破壊されいくだろう。だから、何か新しい契機を農民は見い出して、新しい組織化が行なわればならないという御指摘がありました。それをより具体的におっしゃったのが長谷川さんだったと思います。それはもともとよい土地利用、その「よい」というのがちょっと問題で、それが資本にとって好都合な場合もありましよう

し、生産力という視点でよい場合もあるうし、農民にとって農家所得がふえさせすればよいという意味でよい場合もあり、あるいは生態系の循環の整理に合つていてよい場合もありと、その「よい」の基準をどこに置くかが問題ですが、それはともかく、「よりよい土地利用」ということを農民が考える場合に、「村落」はどう機能するのか。それから、個別経営を継続していく上に、もちろん、その個別経営は高山さんのおしゃった資本の土台の上にあるわけですが、「村落」は必要なのかどうか。どういう点で必要なのか。どういう点で必要がないのか。そういうことをもう少し明らかにしたらどうだということが農業経営側からの御意見ではなかつたかと思います。「ムラ」が個別農家の経営をどう補完しているのか、もし補完機能があるとすれば、その機能がなくなつた場合に、その個別経営農家が資本主義の土台の上で、どのように変わつていくのか。もっと乱暴にいえば、「村落」は現在の農家経営にいるのか、いらないのかというのを経営サイドから御質問としてあつたのではないかと思います。

それから、社会学の方から、それを捉えられたのが安原さんで、これは、「労働」「イエ」「ムラ」というような三つの視点から「農民の生活」というか、「農家生活」といいますか、そういうものの原型のようないものをはつきりさせる必要があるんではないか。もちろん、その原型は、歴史的に形成されるのだから、現代資本主義体制における農民の原形というものをどのように押えるかということが課題ではないかという風におしゃつたと思ひます。その原型に影響を与えるのは、高山先生のお話では、「独占資本」、資本の論理ということで

すが、それを經營内部に持ち込んでくるのは、農業の生産力であり、さらにその基礎として農法といいものがあるかと思います。農法・生産力を含んだ農民の生活原型といいますか、農民原型、そういうものを明らかにする必要があるのではないか。その細かい点は「労働」「イエ」「ムラ」について、それぞれ社会学として、るべき課題をいくつか箇条的におあげになつたと思うわけです。そしてその延長上に、木下君は「村落」というのは「イエ」的な原理というものによって構成されているのではないか。つまり、「イエ」のある所に「ムラ」があり、「イエ」が薄い所には「ムラ」も薄いのではないか。その「ムラ」の原理といいますか、「ムラ」とはいつたい何かといいますと、それは「ゲマインシャフト」的なものなんだと木下君は言つたと思います。

このように皆様のお話を伺つてみると、第四点として、今後の我々の地道な進み方としては、現代の農民の生活はどうあるのか。どのような状況にあるのか。具体的には、その「農法」「労働」「生産力」が「イエ」「ムラ」とどのようにかかわつてゐるのか。さらに「資本」とのかかわりあいがどうなのかといった形でひとつ押えていく、そういう手続きが必要ではないかと思います。その中でいいどこから我々としては本年とり組んでいくかというような筋道で御議論いただけすると、来年のメイン・テーマが出てくれるのではないかと思います。

そこで最初に、この「村落生活」を「農家生活」と読みかえていいかどうかについて御意見を伺いたいと思います。

高橋 それには問題があるのでないでしょうか。農協の問題とか、

村落をこえた場面が農家生活にはあるので「村落生活」イコール「農家生活」とは必ずしもならないんじゃないかという気がします。ですから、どちらに重点を置いてつかまるのか。「村落」に重点を置くのか、「農家」に重点を置くのかということになるのじやないか。島崎 いいえ、そうじやない。課題は「村落生活の変化と現状」と出でいながら、「村落」をたれも明らかにできなかつたじやないか。だから山本君は「農家生活」しか捉えられないんじやないかといつてはいる。

高橋 しかし、だからといって「村落生活」と「農家生活」を置きかえることはできませんね。

安原 実は去年のタイトルが決まつてきた経過を申しますと、「農民にとっての生活破壊とは何か」から先に始まりました。しかし、村落社会研究なら農民だけではなく漁民も山村の人もある。そこから農山村に居住している人達の生活問題を包括できるような表現にすべきだというので、「村落生活」というタイトルが使われたわけです。ですから「村落生活」そのものが主題であるのではなくて、農民生活や漁民生活や山村生活、そういうものが中心で実はあつたわけです。

中野 その際、農山漁民の生活とはいつても兼業は進行しているし、村落を通勤の基地としてだけ使つているような世帯もある。「村落」という中には、そういう兼業通勤している人達をも、やっぱり含めて考えないといけないと思います。

安原 もちろん、そういうふた農民生活や漁村生活・山村生活が再生産される場合にやはり「村落」というものをどういう風にして捉えるかと

いうことも議論に入つてきました。

陽三 そうすると、いまの言い方でいうと、農山漁家の—高橋さんの言葉を借りていえば—村落の枠の中での生活のあり方という風に理解していいわけですか。

高橋 村落をこえる生活のつながりを村落を理解するための条件としてみるのか、それとも農家の側から総合的にみて、村落のその生活にたいして、より大きな位置を占めるという形で結びつけて考えるのか。そこでだいぶ違つてくると思う。

陽三 昨年は「村落生活」についてはあまり論議がなかつたので、その中のどこに力点を置いて解説するかというところまで先回の議論はきていたわけです。そこで、今までのお話から農山漁家の「生活」というのを焦点にすえて、それを解説する際に相互依存の関係にある村というのが当然視野の中に入つてくるわけだからその意味で、「村落」を考えるというのによろしいんでしょうか。「村」の方に力点があるのではなくて、「生活」の方に力点があると。

安原 村落における生活なんですね。

中野 それでいいと思います。が村落社会の特殊な部分だけをカタカナの「ムラ」という風にいう人がありますから、注意しないといけない。今回の場合は、現在の生活というものを捉えそこねる恐れがあるので、正確には、「村落社会における生活」という風に押えておきたい。

(2) 農家生活の「原型」とは何か

中野 私は、「変化」というんだつたら、何から変化したかという理由

があると思うんです。安原さんが言ったのに賛成なんですが、原型をはっきり捉える。しかもその原型というものは歴史的なものだから段階に応じてある。徳川時代からの変化なら当り前のことと、別に苦痛や破壊だと感じたりしない。しかし、その場合にも少し疑問がある。例えば、原型なるものをいま成長に入っているから、高度成長期の村落が原型なのか。それを原型にすることもできるでしょう。けれどもそれだけでは問題の解決にならないんです。ですから、僕はいろんな段階、いろんな時期を複数にとって、それぞれにおける原型を複数出しておく。例えば、終戦直後とか、民主化時代、あるいは食糧危機の時代をなんとかのり越えた時代、という風な所。それから高度成長。そして現在。それぞれに原型がとれるわけではないでしょか。それをつらねたところで、現在生きている農民はそれをどう見ているのか。

これは大変なことだと思うのか。それとも安心するのかですね。ですから原型というのは、一つだけとって、そこから選び出すのはまちがいだと思います。

島崎 いくつかの段階に分けてやっていかなくてはいけないのですけれども、その場合、安原さんの言われた原型というのは非常に疑問で、そんなもの出来るのははずはないんです。戦後段階といいい方はやはり日本資本主義の戦後段階なんで、農民からいえば、農民的土地区劃を確立していないんですよ。土地所有の範囲からいうと、地主的土地区劃所有はいろんな論議のすえ、戦前の日本の農業生産構造規定的区分として定義され議論されてきているのだけれども、農地改革後の農民的土地区劃所有に関しては、まだ範囲規定はまだ出されていないと思うんですよ。

それについてみんな理論家とか現状分析する人が苦心惨憺しているわけですね。それでもなおかつ明らかにされていないんです。だから、農民的小土地所有ということでゴマかしたり、農民の零細私的所有という言葉で、なんとか範囲規定を避けたりね。だから、戦後の農民をどういう範囲的に捉えるかということは、非常にむずかしい課題でありますね。もちろん、むずかしい課題を想定して安原さん質問出したのか、あるいはもっと安易に出したのか。どうも後者の方に感じるわけです。そういう原型といいうものが、すぐ出てくるかどうか。だから僕はそれをわざとくずして、「伝統的な」というように言葉を柔らげて出したりするんですよ。その辺は、そういう問題設定をやる場合、非常に慎重でないと、何が原型なんだということになるんだろうと思います。

安原 これは私、内容を確定していませんから、安易だと言われればそうですが。しかし、現在、さつき島崎さんのおっしゃったことですけど、農地改革によって創始された私的所有をどう規定するかということと自体が確定していない。こういう時期に歴史的な経過を振り返ってみて、例えば、農地改革とは何だったんだろうかということはある程度明らかにしうるわけです。そういうことをこの際、いろんな形いろいろな側面から攻めてみてゆく必要はあるんじゃないかな。それを攻めませんと、いつまでたっても同じようなことの繰り返しで、蓄積というものは生まれちゃこないんではないか。そういうむずかしい問題をとりあげなくてはならない時期がいまやつてきているんじゃないだろうかという気がするんですね。例えば福武先生が、家族主義というのを問

題にして、そして民主主義的な家族制度・民主主義的な農民生活・農

家生活等々を問題にした場合に、現在の家族は民主化されていると、あそこに提起されたかうこうでの民主化というのは行なわれたのか、行なわれなかつたのか。それを確定できない場合、やはり、あの時に提えた家族主義にたいする把握が、あるいは家族主義批判の視点自体にも問題がありはしなかつたか。また戦後自作農体制の終焉と使われたりしますけども、そういう戦後自作農という概念もなにもはつきりしていない概念で論者は勝手に使うわけですが、やはり、そのあたりもう少しきらんとつめていく必要があると思うんですね。しかもその場合に、自給的なものをどう意識していくのか。あるいは、土地そのものは、どう意識されていたのか。どういう機能を持つものと考えていたのかということ。それらについては若干の意識調査なんかで追究したこともあります。そういうものをひっくりくるめて、やはり自作農とはなんだ。この問題はあるんですね、これは。このあたりの構造を明らかに触れませんと、新しい農民的生産力形成といいましても、いつたいどういうものがそれに当てはまつてくるのかというのも明らかになつてこない。そういう意味で、農地改革、その後の利点、こういうものが私としてはいまのところ、戦後についてはできていると考えまして、そのどういうかうこうで変わってきたのか。所得追求のようないい、あるいは貨幣所得追求だけですと流れていつてしまふというのは、ある部分の中にあるんですね。ですから農業の手を抜いてアパートを経営したり、あるいはそういう農民の転出を考える場合には、やはりどういう条件が、そういう農民意識を誘発するのかを明らかに

しなければならないと思います。

陽三 いまの原型範疇規定の問題ありましたけども、その中でも私は混乱があつて、生産と生活がこっちゃに論ぜられると思うんですね。農業経営の立場の方から、農家生活の原型という言葉を仮に聞けば、それは、土地を耕して、生態系の循環を破壊しない形で、食べ物を再生産していく。その経営のあり方が原型なんですね。その生態系の循環がうまくいかないような形で、生産力を追求しなければならない。そういうことが経営学の方からいえば、一つの「破壊」とも写るわけです。

島崎 安原さんがいっているのは、農地改革という問題を出しているのだから、原型というのは歴史的な範疇として出しているんですね。だから、単に農家経営という問題ではない。

陽三 しかし「農家生活」は歴史的範疇だけでは、計られないものです。そのもう一つ基礎に、農業というものが、農法が、またそれを基にした農業経営があるんじゃないですか。だから、僕は、原型という言葉を聞いたたら、その原型というのは、生態系循環がうまくまわるような農業がやれる。そのような条件のもとでの「農家生活」が原型なんだ。そんとこを、社会学の場合はどうも抑えきれない。というか、理解しようとしている。せつからく経営の方がおられるわけだから、その辺りを伺つてみたいと思います。

中野 経営の理想型みたいなものを原型というんだつたら、ちょっとおかしいなと思うわけです。それはもう理想型と考えてもいいわけですがけれども、理想型みたいなものがまた、それぞれの時期によって、ちが

つた形で考えられてきたと思うんですけどね。例えば高度成長期の理想型と考えられたような経営が、その前の時代のあるいは今の理想型であるのかどうか。

陽三 それは「農業」というか「生物の育成」というか、そういう意味での原型はあるはずですね。

中野 だから、そういうものを研究者が設定することはね、わかりますけども、つまり、農民があるいは漁民がそれを描き出すとすれば、歴史的にちがう段階でちがうものを描き出すんですね。そう抽象的にあるわけじゃないですね。

陽三 それは抽象というより、より実質的なものと思いますね。研究者が設定するのではなく、自然が設定したものですよ。

高橋 その生態系を壊さないようにいろいろ有機質をつぎ込むとか、いろいろやってきたことはあるんですね。

中野 それは研究者の解釈であってね。研究者はそういうように解釈できるようなものを、それぞれの段階に含んでいたのは確かですね。だけど、それを歴史的な原型だとはちょっとといえない。

高橋 そういう小生産の仕方自体にも、僕はおそらく、生態系の循環を壊わすような生産の仕方を強制されるような時代もあると思いますね。

島崎 だからね、それを作り出そうという提言としてはわかるんですよ。自然循環の中で位置づけると国土庁の文章の中にも、はっきり書いてあるんですがね。地域農業経営システムと。農民を専門分化して、農家の結びつきを地域の中に作り出していくというような形での地域複合という一つの考え方を出してきた。例えば豊岡村みたいな所がモ

デルになつておるんだけれども、やはり豊岡村みたいな所のモデルを実際にやってみたら、非常に現在の農家を削減してね、やぐらに削減した計画ですね。あれは、あれが、はたして現実に成功するのかも疑わしいけども、論理的に、いま中野さんが言ったように論理的に作り出したものなのであって、論理上、原型かも知れないけども、現実的ではないんだ。

中野 例えば、江戸時代の一官尊徳というような人が述べている農法あるいは農家議論は、いま言われたようなことを含んでいると思うんですね。現在、政府の指導なり、政策の中でもうたわれているものでも多少いえるわけですよ。だけども、それは共通のものとしてあるでしょうけども、しかし我々は、農民なり、漁民なりが何を「破壊」という風にして苦痛として感じているかということで考えれば、もつと具体像を持ったものじゃないかと思うんです。それから、土地所有の話が出ましたけれども、土地所有の意味がはつきり掴めていないから、だから原型が立てられないという説明聞きました。が、僕はそう思わない。もちろん、それは解決されねばならない問題でしきょうけども。農民が「破壊」と感じるのにはもうちょっととちがうことで、金はあるんだけども、それを論理的に、はつきりしなくとも破壊ということが農民にはわかる。そして、それにたいして強く反発していることはあると思うんです。だから、どういう原型の破壊かということを議論する場合に、私の好みか、方法か知らんけども、私の考へるのは、原型といふのは、農民が破壊と感じる場合の基準になつていて何が変えられるか。それは、經營ももちろん入っているでしょうし、消費生活もみん

な入っているでしょしね。それらの総合において、農民危機に陥っているという感じというものがあるんじゃないだろうか。それを探さねばいけないんじゃないかと私は思っている。

高橋 それは、農民自体が、地力の低下によって危機感を非常に持っているんじゃないでしょうか。それと、東北冷害が強いですね。それから、連作障害もまた出ていますね。それでも、そういう作り方をしなければやつていけないということは大変な問題。これは、観念的ではなく大変具体的な問題です。

中野 しかし、今の冷害というのは、従来の冷害とはちがうと私思いますね。だから、そういう具体像において原型を考えたいといっているのです。

島崎 山本さんが言われたこと、おそらく、今日の発表でいえば、高山さんが最後触れようとしてカットされた部分なんだと思うんですね。だから、そこそこをもう少し原型という言葉を使うのはどうもひつかかる。今、現在、新たに作り出す農業の生産力のシステム、そういうものを、どういう風に地域農業として、考へ出せるのかどうなのか、ちょっとと触れてカットされたと思うんです。この問題でしょ。

中野 実際に、これが原型だというのは大変困難ですよ。困難ですから、使つてもいいと思うけど、それを明らかに出さなきやならないと思つたら、それは出せたら、もう解決できるんですね。村研も何もいらな印度ですね。そんなものわかつてんだつたら。

陽三 だから高山先生がおそらく言われたと思うんですけども、資本による組織化でなくして、農民の主体的組織化というの

ルクスも認めているので、その組織化の場として、「村落」の持つ意味があると私は考えています。

島崎 一応、現在の独占資本の枠内で解決のつかないと高山さんは言つている。それを前提にした上で、地域農業の再構成みたいなものが、どういう形で、できるのかという問題を出している。国土庁の文章は、何か作り出そうという意図で、できていると思うんです。だから僕は、それはそれ自体観念的だと思っていいけれども。

陽三 原型という言葉がひつかかっているんですが、終戦直後の農家生活はこうであった、それから高度成長期に入る前はこうだった、高度成長期はこんなものだった、現在はこうだ、そういう流れの中を農民は通つてきて、今の生活をどう評価しているかということを明らかにしてみよう。その経過をたどつて行くためにも、それぞれの時代の平均的農民像のようなものを明らかにしたらどうだ、というのが中野先生の意見ですね。

中野 私は、「原型」という言葉を使つてもいいと思いますし、安原さんが使つた意味もわかるから、使つていいと思います。ただそれを、あまり抽象化しない方がいい。抽象化して決定してしまいますと、それに賛成でない人は、発表しにくくなっちゃうので、討論できないから。だから、「原型」という言葉を使うんだつたら、ゆるやかに使えるいい。そして經營の原型といつてもいい方で使う人も、村落生活の原型という形でそれを考える人も、一緒に議論できるような場を作つておくことが重要ではないでしょうか。

陽三 そういう来年の討議の進め方からいふと、一番とりつきやすいの

は、長谷川さんの御提案ではないかと思うんですね。土地利用について、「村落」はどういう役割を果してきたのか、これからどう果すのか。地力の再生産に、「村落」はあるのか、ないのか。つまり、個別農家の経営に、村落はどうかかわっているのか。これらの面を、農業経営の側面から照し出していただき。経済学の方は、そこで農業経営にかかわりをもつ「村落構造」のどの部分がどうかわかるのか、その内容実態そういうものとのかかわりにおいて、どのような村落構造のあり方が、もっとも農民の農業経営にベターなのかを、社会学の方からは、「村落規定」を明らかにしていく過程で試みる。この経済の方からと社会学の方からのアプローチをドッキングしたら討論になるのではないかという気がしますが。

長谷川 ただ、私は非常に「村落」の機能の方に重点をおいて話しましたので。私には「村落」そのものがわからないものですから、まず具体的な場面で追って行こうということで発想しているわけなんです。中野 「村落」とは何かと、わかるわけはないんで、わからないから、研究会を開いているんで、それは永遠のいつでも求められているものですよ。

(3) 来年の課題設定について

陽三 そろそろ来年の課題の設定に移りたいと思います。例えば、九大の農業経営の研究室が2年間、「集落農業の現状と課題」という共同研究をおやりになつた結果ですが、たとえば、一軒だけいいみかん農家があつてもダメなんで、産地形成しないと、流通の面で弱い。また、

いい産地というのは新しいイノベーションが入つてくると、それを「村落」全体に拡げて、村落全体を高水準化していくコミュニケーション・チャンネルを持つている。それのない所は駄目だそうです。そのコミュニケーション・チャンネルは、社会構造といつてもよい。とするところ、どのような社会構造ならば、イノベーションという情報が伝わるのかという問題になります。ただその時、経営の方が言われる「集落」の実体は何かといいますと、場面によってちがつてくるでしょう。いまのように、コミュニケーションのネットワークのこともある。土地基盤整備とかの行政からの受け皿になつている場合の「集落」の「まとまりのよさ」といったものを指しておられる場合もある。よい「集落」がなければいい農業はやれないという事例がたくさんあるわけです。その「集落」農業という場合の「集落」の実体を、構造と機能面においてはつきり出していくというのが、社会学の課題ではないかと思ひます。その辺りを安原さんが、「イエ」「ムラ」「労働力」ということで出されたと思うのですが。もう一度この辺りから、どれをキイにして今年はやるかを御討議下さい。

島崎 「イエ」「ムラ」「労働力」というと概論風ですから、それを具体化して、「生活破壊」とわざわざ昨年は具体化させたわけですからね。

山本英 きわめて具体的な提案ですけども、例えば、細谷さんが人間というふことを言っておられたし、今日の長谷川さんもにない手を問題に

されたわけ。そういう意味では、農民主体論、例えば農民が現状をどのように認識しているのかというような意味での意識・態度・思考みたいなものと、長谷川さんの出されたにない手の主体形成をどういう風に考えていいたらいいかというようなことで、主体論的な捉え方もあっていいんじゃないかと思うのですけども。

高橋 その問題も一般論でふうといろいろむずかしいんですね。主体形成というのは、だから、具体的にある動きを示して、何かをやつしているというような所で、何か形成やつしているというような所で現実を今まで、どういう主体がそれを担っているのか、そこで村がどう動いているのか、それにどう「イエ」がかかわっているのか。逆に今度は、ガタガタに解体していく過渡地帯で、村がどうなり、イエが解体していくのか、と問題を把握しやすい場面を掘りてくる必要があるのではないか。あるいは、豊岡村の場合、あれは複合経営の問題ではなくて、土地利用の問題ですね。一地域、農業をやめた所があり荒地が非常に多かった。そういう土地をどう利用するかという場合には、どう村落やイエがかわるかという問題。または、集合農場的な経営で村落がどうかかわるかということもある。

島崎 「生活」とか、今問題になつてゐる「村落」とかは我々が考える以上に、農政の方がはるかに up-to-date に捉えていたわけですよ。農政側の官僚とか、資本の側の危機意識みたいなものがあつて、それで生活を上から出されてきてる。補助金なんかをみても莫大に出されてくるわけですよ。そういう農政の方がよりほど up-to-date なんですよ。なぜ農政の方がそれをやらないのか、そこを

つかなくては研究会にならないわけだ。農政に賛成にする、批判的立場に立つにしる、なぜ今日そういう「村落」が出てきたり、生活法なんかが農政の立場が捉えてきたのか、もう少しはつきりさせなければいけないと思うんですよ。やっぱり現在の農民の生活が大変せつぱつまつた所に追いこまれていて、それを放置できないから、その線の方で出てくるんです。ですから個別経営をいくらやつてみてもうまいかないから、それでは「ムラ」でひっくり出してもうとすることになるわけで。だからその辺少し当つてみた方がいいと思うんですよ。もちろん歴史的に逆のぼつてもいいんだけど、もちろん現代が出発点になる問題で、社会学出発点だから。例えば、土地の荒廃というような問題、國土の荒廃というような問題がいろいろ重大化していくから、個別経営ではつてもそれをさせざれない。そこで土地保全機能みたいなもの、確かにそれ持つているわけで、そこに田をつけたらどうだという提案なんだと思うんですよ。やっぱり現状の危機的状況の把握の中から、出されてきている農政上の課題だとみたいくらいですけども。その把握がちょっと弱いんではないかな。

高橋 その通りです。ただ、今この研究会で直接、農政がどうこうといふのではなくて、具体的な場で議論するんだから、そういう問題をとりあげてどう見るか、考えてみていいんではないですか。研究結果をもあえて議論するのはいろんな議論があると思うんですね。

陽三 ただ今ここで議論をお願いしているのは、「村落生活の変化と現状」というメインテーマのみ出して、あとは御自由にどうようとす

るのか。しかし副題がないと焦点が、いろんなデータがばらばらに出きて、議論がぼやけてしまいますから、何か副題がほしいわけです。

ね。

長谷川 やつはアンケートで出された「自治組織」というのは、どうい

うニコアンスというか発想で出されてきたのですか。

陽三 テーマだけ書いてもらつたので、その背景はわかりません。私は、

「村落」は元来農民が自制的に作ったものだが、ときどきの権力により支配の単位として組み込まれてきた現代では資本に押え込まれている。そして行政との対応機関となつてきている。しかし、現在の資本によるあるいは行政による再組織化ではなく、農民の主体的なエネルギーによって、農民の生産と生活を守る自治組織として再編成できるのではないか。伝統的な「村落」の中に前向きのエネルギーを見つようという観点で、私が「自治組織」という言葉を使う場合には使っています。

中野 自治ということは、自治体という言葉がそうであるように、行政末端機関のことを一応、自治体といつてしましますから、ちょっと誤解が生ずるかも知れないけど、自治という言葉をそういう意味からはずして、村の人は考えることはありますよね。それで行動していることはありますから、お金をとるために手段として自治が働くこともありますし、あるいは農業機械の協同購入の返済するために自治が働くこともありますしね。ですから、自治組織というのがそういう意味で説明つきで農家経営との関係において、それを扱うということは要望にもそろし、かつ今高橋さんが言つたこととも齟齬しない。

陽三 すると、その説明付きで自治組織というより「農家生活の主体的再編成の可能性を探る」とやつたらどうでしょう。

島崎 やつぱり村の土地保全も、広い意味で自治に含めて考えていいと思いませんね。

中野 村落に於けるというものを付けてね。

島崎 極端にいえば、土地の自治管理がいったい可能なのかという大変な問題までつながってきますね。

陽三 自治という言葉を使わないとすれば、再編成・主体的再編成ですか。破壊されているから。村落生活の主体的再編成ですか。再組織化ですか。では、宿題委員会からは、来年の共通課題を「村落生活の変化と現状——その主体的再編成をめぐって——」として、運営委員会に提出することにいたします。